

小澤圭次郎（酔園）の東京府立園芸学校に於ける造園教育 について

誌名	ランドスケープ研究
ISSN	13408984
著者名	小坂橋,二三男 進士,五十八
発行元	日本造園学会
巻/号	73巻5号
巻号補足	
掲載ページ	p. 786-795
発行年月	2010年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



■ 研究論文

小澤圭次郎（酔園）の東京府立園芸学校に於ける造園教育について

Gardening Education by Keijiro Ozawa at Tokyo Metropolitan School of Horticulture

小坂橋二三男* 進士五十八**

Fumio KOITABASHI Isoya SINJI

Abstract : In April 1908, Tokyo Metropolitan School of Horticulture was established. This school was the first institution for horticulture education in Japan. Gardening education was officially included in its curriculum for the first time in Japan. Keijiro Ozawa was invited as a teacher of gardening by the second principle of this school, Taketaro Suzuki. His first lecture of gardening at this school began on June 21, 1911. We studied the gardening education by Ozawa at this school and found out many unknown documents and works of him. Making use of these findings, we focused on his carrier and works, his lecture, his textbooks used for gardening education, and his basic attitudes towards gardening and gardening education. In this period, he was the only man for the teacher of Japanese garden and gardening with enough carrier and works on gardening. He used three old books on Japanese gardening for the textbooks at this school. These books were *Senzaihisshyou(Sakuteiki)*, *Sansuinarabininogatanozu* and *Musouryuukazanseisakunoki* that he edited himself. Ozawa believed that Japanese gardening types consisted of just following three, *Sansui*, *Hiraniwa* and *Karesansui*. In June 1911, he also planned campus garden for this school. This garden plan consisted of three Japanese gardening types mentioned above.

Keywords: *gardening education, Tokyo Metropolitan School of Horticulture, Keijiro OZAWA, books on gardening*

キーワード：造園教育，東京府立園芸学校，小澤圭次郎，園方書

1. はじめに

明治38年(1905)、東京帝国大学農科大学教授横井時敬(1860-1927)は、日本園芸会雑誌に論説「園藝学校設立の必要」を發表している¹⁾。欧州留学中(1899年5月~1900年11月)に各国園芸学校を視察した経験から、園芸学校設立の必要性について次のように記している。「今日の園藝といふもの、主とする所は先づ第一に花卉、次いで果樹蔬菜などの培養にあるかの如く思はれるが、庭園藝といふことも決して之を等閑にすることが出来ぬ。一略一、顧みて我國を見れば園藝学校といふものは一つもない。我が國の農學校では園藝の事を兼ね教ふことがヨーロッパの學校よりは善く出来るに相違ないけれども、是を以て満足することは無論出来ない。一略一日本の園藝は全體に於て歐米に劣って居るといふことである。一略一そのうちで獨り庭園藝に至つては却つて日本が優つて居ると考へる。一略一今日の國家が盡すべきは眞善美に就いて我大和民族の特長を益々發揮せしめて海外に誇るに在ると思ふ。而して、予は庭園藝の如きはその特長の一であるといふことを信ずるのである。是に於て予は益々園藝学校設立の必要にして且つ急務なることを主張せねばならぬ。」横井は、園芸作物栽培と、欧米より優れている「庭園芸」(庭園)の教育のために園芸学校の設立が必要だと主張しているのである。横井の主張が、後の園芸学校設立に直接結びついたかどうかは不明であるが、少なくともその動機の一つとはなったものと推測できる。

明治40年代初頭に、園芸の名を冠した我が国初の學校が、2校創立された。明治41年(1908)4月開校の東京府立園芸学校、翌明治42年(1909)4月開校の千葉県立園芸専門学校の2校である。また、明治42年(1909)年、大阪府立農學校に新たに園芸科が設置される²⁾。この3校に於いて初めて、「庭園」がその学科過程(教育課程)に位置づけられた。つまり我が國の農業教育機関において、その教育課程に位置づけられた造園教育は、この二つの園芸学校及び大阪府立農學校園芸科の3校に於ける「庭園」から始まったのである。

千葉県立園芸専門学校の設立時の教育課程には、「庭園」は設置されていないが、翌明治43年(1910)の教育課程の見直しにより、園芸関係学科目の一つとして「庭園論」が創設され、3学年1学期、毎週3時間履修と定められた³⁾。庭園論の講義は、第1期生3学年対象に明治44年(1911)に開始され、初代学校長鏡保之介(1868-1931)が、開講から翌年6月26日朝鮮総督府勸業模範場技師転任までの約2年間担当している。上原敬二(1889-1981)は、鏡によるこの講義を、「全国の學校において高下を問はず庭園の講義を行ったところはこの學校をもって最初とする。」とその意義を指摘している⁴⁾。

一方、東京府立園芸学校では、すでに創立時の教育課程に学科目園芸の3学年6時間履修の教育内容(具体的には果樹、蔬菜、觀賞植物、庭園、温室管理、果菜調理)の一つとして明記されていた⁵⁾。千葉県立園芸専門学校での学科目庭園論設置に先立つ2年前のことであった。したがって、我が國の農業教育機関において、その教育課程に「庭園」が明記されたのは、東京府立園芸学校の教育課程を以て嚆矢とすることができる。

東京府立園芸学校に於いて教育課程通りに教育が実施されたとすれば、庭園の講義開始は、明治43年(1910)となる。同年8月、宮澤文吾⁶⁾が、「植物、病理、地質、花卉、庭園及び実習」担当教諭として、赴任する。したがって、2学期から宮澤による何らかの「庭園」の講義が行われたと推測できるが、これを裏付ける資料は現存していない⁷⁾。後述するように、記録上明確なのは、小澤圭次郎(1862-1932号酔園)が、明治44年(1911)からこの講義を担当したことである。

千葉県立園芸専門学校の造園教育については、西村公宏の研究⁸⁾があるが、東京府立園芸学校に於ける造園教育については、小林治人⁹⁾によって小澤圭次郎の造園教育について、わずかに紹介されているのみである。

本論文では、これまで殆ど知られていない東京府立園芸学校に於ける小澤の造園教育について、新発掘の資料をもとに講師就任

* 東京農業大学大学院農学研究科環境共生学専攻 ** 東京農業大学地域環境科学部造園科学科

の経緯、庭園講義の実態、講義に用いた園方書、さらに小澤の庭園観、造園教育観について明らかにする。

2. 小澤圭次郎の造園関係業績と東京府立園芸学校講師就任

(1) 小澤圭次郎の経歴及び造園に関する業績

小澤圭次郎は、天保13年（1842）4月2日桑名藩の医官小澤長庵の次男として生まれ、文久2年（1862）、長兄の死に伴いその跡を継いで藩医となる。慶応3年（1867）、藩命により桑名に帰藩、明治3年（1870）、東京にもどる¹⁹⁾。この後、明治4年（1871）から、官職に就く。

今回、新たに見いだした、東京府立園芸学校講師就任にあたって東京府に提出された、小澤自筆履歴書（表-1）には、官職経歴が、詳細に記載されている。小澤の官職経歴は、明治4年（1871）の海軍兵学寮出仕に始まる。翌5年文部省に転じ、「字書取調」となり、明治6年（1873）4月から、東京師範学校勤務となり、同8年（1875）5月に同校学校長補、教諭を経て、明治10年（1877）8月には、同校訓導となる。明治12年（1879）3月に東京学士会院書記に転じ、東京図書館一等書記兼東京教育博物館詰、東京図書館・東京教育博物館庶務掛兼図書館掛を経て、明治19年（1886）3月29日、東京学士院書記辞職を最後に官職から離れる。

この後、造園研究に邁進、「園林叢書」執筆のかたわら、明治23年（1890）、美術雑誌「国華」への「園苑源流考」連載を皮切りに、「日本園芸会雑誌」、「園芸之友」、「建築工芸叢誌」に多くの論説、記事を執筆し、単行本2冊、執筆・編集している。これら小澤の造園関係執筆業績を整理したものが表-2である。

また、履歴書後半に見られるように、多くの庭園・公園等の設景（小澤は「設計」の語ではなく「設景」の語を用いた¹⁹⁾）も手がけている。小澤は、まさに学と造園実務の両方を実践した造園家であり、東京府立園芸学校「庭園」講師としては、その経歴、業績共に申し分のない、まさにうってつけの人物であったといえよう。

小澤は、自己の造園研究について「庭園に就て」の中で「扱て私は、生來の造園道樂であります、曩に官途に居し頃から、餘暇に園事を心掛おりて、既に三十有餘年來、和漢の造園の事に就て、一身を犠牲に供し、百事を抛擲に付して、今尚一大著述 園林叢書と題名 に従事し、是非とも生前に竣功して、身後に遺傳すべき志願で、編輯しつゝあります」と語っている²⁰⁾。この記述から小澤の造園研究は、官職にあった明治10年代からすでに始まっていたことがわかる。筆者の見解によれば、小澤が造園研究に本格的に乗り出した時期は、履歴書の記載から推測して、明治12年（1878）の東京師範学校から東京学士会院書記へ転じた頃ではないかと推測できる。収入の大幅な減少（約三分の一）にもかかわらず東京学士会院書記へ転じているからである。

また、小澤の庭園研究の動機について、上原は、「どうして庭園研究に入ったかについて筆者の質問に答えたのは京都の名園の美しさに魅せられたとのこと²¹⁾」と記している。

上記「庭園に就て」の引用文の中で注目すべきことは、冒頭の「造園道樂」の語に「にわつくりだらう」とルビを付していることである。このことから小澤は、「造園」の語を「造庭」あるいは「作庭」の意味で使用していることがわかる。また、明治23年（1890）連載を開始した「園苑源流考」の中で、小澤は「造園ノ濫觴」（庭園の始まりの意）の語を使用し²²⁾、この後も本連載の中で「造園」の語を多用している。つまり、小澤は「造園」の語を「庭園」、「造庭」、「作庭」の意味で、使用していたのである。これは、上原の「この時代およびこれ以前の造園家は日常対話の際、庭園とか、庭とかという発言を行わず、それと全く同じ意味で「造園」と称していたことは特に銘記しておきたい。」との記

述とも一致している¹⁹⁾。このことから、本論文の表題に「造園教育」の語を用いたのは妥当性があるといえる。

なお、明治・大正期の著名な園芸学者、宮廷園芸技師であった福羽逸人（1856-1921）は、小澤を「本邦造庭法ノ大家」と評価し、世間に正しく理解されないことを嘆いて「一略一偶々本邦造庭法ノ大家小澤圭次郎氏ノ如キ人アリト雖モ世人ハ氏ノ誠見ト技倆トヲ玩味スルノ常識ナキカ為ニ往々氏ヲ歡迎セス実ニ痛歎ノ至リナリ²³⁾」と記している。また、東京府立園芸学校の卒業生磯村春夫（大正15年（1926）卒）は、庭園視察での小澤の思い出を「三年になると小沢先生引率の庭園視察があった。品川の岩崎邸では、豪壯な住居の前庭に家紋の輪違いを道に作ってあった。小沢先生は案内しておられる当邸のご主人に対し、自分の羽織の紋を指さして「己の紋を他人に踏まれたらどんな気がする」と言われた。」と記している²⁴⁾。これらの記述から小澤圭次郎の人となりを理解することができる。

表-1 講師就任に当たり東京府へ提出の小澤圭次郎履歴書

履 歴 書			
本 籍	東京市本郷区駒込富士前町五拾番地		
族 籍	平民		
現住所	本籍ニ全シ		
小澤 圭次郎			
天保十三年四月三日生			
担当学科名	庭園		
年 月 日	任 免 賞 罰 事 故	官 衙	
明治4年11月14日	海軍兵学寮十三等出仕申付候事	兵部省	
全 12月26日	十二等出仕申付候事 海軍兵学寮出勤如故	全	
全 5年4月17日	兵学寮十二等出仕申付候事	海軍省	
全 7月28日	出仕差免候事 御用有之候ニ付滞京申付候事	全	
全 8月2日	兵学寮十二等出仕申付候事	全	
全 9月15日	兵学寮十一等出仕申付候事	全	
全 10月19日	依願出仕差免候事	全	
全 11月5日	十一等出仕申付候事 字書取調申付候事	文部省	
全 6年4月22日	十等出仕申付候事 編書課可相勤事	全	
全 4月25日	東京師範学校出勤可相勤事	全	
全 7年9月9日	任三等教諭	全	
全 12月3日	監事兼勤申付候事	東京師範学校	
全 8年4月27日	当分師範学校校長ノ心得ヲ以テ事務兼勤可事	文部省	
全 5月22日	東京師範学校校長補ノ任ヲ嘱シ一ヶ月金六拾円交付候事	文部大輔田中不二磨	
全 10年8月31日	東京師範学校訓導ノ任ヲ嘱シ一ヶ月金八拾円交付候事	文部省	
全 12月21日	依願東京師範訓導ノ任ヲ解候事	全	
全 日	当校へ相雇壹ヶ月金八拾円交付候事	東京師範学校	
全 日	事務兼教員可相勤事	文部省	
全 12月23日	依願雇相解候事	全	
全 12年3月1日	東京学士会院書記ノ任ヲ嘱ス一ヶ年金三百円交付候事	東京学士会院	
全 13年3月23日	一ヶ年金六百円交付候事	全	
全 14年4月20日	御用掛申付候事 取扱判任ニ準シ月俸給金五十円交付候事	文部省	
全 " " "	内記局可相勤事	全	
全 4月29日	文部省御用掛被命候ニ付一ヶ年金六百円交付ノ儀本月限り廃止候事	全	
全 5月31日	本院書記嘱託申付手当一ヶ年	東京学士会院	

金二百四十円交付候事		
全	10月24日	内記課勤務申付候事
全	16年12月10日	任文部一等属
全	18年2月18日	内記局詰申付候事
全	6月4日	任東京図書館一等書記
全	日	兼東京教育博物館詰申付候事
全	9月21日	庶務掛兼図書掛申付候事
全	日	庶務掛兼図書掛申付候事
全	19年3月29日	非職申付
全	4月3日	依頼東京学士会院書記解任
全	4月7日	東京学士会院書記勤務中勉勵候ニ付 為手当金五十円給与
全	22年5月3日	非職満期ノ処在職満五年以上ニ付 月俸三ヶ月分給与
全	21年7月	伊勢神苑会ノ聘ニ応シ山田ニ出張、内宮外宮神苑新設 案図案並ニ解説及予算書ヲ作製ス
全	22年3月	両神苑築造ニ着手全九月落成ス
全	30年6月	香川県知事徳久恒徳ノ嘱ニ応シテ栗林公園保護論ヲ著 作ス
全	26年10月	日本園芸会ノ依託ヲ兼テ公園論一冊ヲ著作ス
全	36年1月	群馬県高崎市役所ノ聘ニ応シ全公園改修ノ設景図案並 其解説及予算書作成ス
全	36年3月	東京帝国博物館長股野琢ノ依託ヲ承ケ上野公園内一部 ノ新修設計図案並ニ其解説書ヲ調製セリ
全	40年8月	大阪市長山下重威ノ聘ニ応シ天王寺公園ノ設計図案其 解説及予算書ヲ調製ス
全	42年1月	天王寺公園築造ニ着手シ完成セリ
全	42年4月	農商務省内日英博覧会事務局ニ召喚セラレ全博覧会場 内ニ築造スル処ノ純粋ナル日本庭園設計ノ件囑託セラ レ設景図案並ニ其解説及予算書ヲ調製ス其他公私ノ依 託ニヨリ庭園築造ニ従事完成セシモノ多シ

・小澤が東京府に提出した自筆の履歴書を横書きに改めた。年月日欄の数字は、算用数字とした。この記述からわかるように、小澤は、官職の経歴については、交付された辞令の文面をそのまま記載している。明治44年、第1類・文書類纂・学事第9類・府立学校職員第3巻取蔵、東京都公文書館蔵より作成。

表-2 小澤圭次郎造園関係執筆業績一覧

国華 (明治22年10月創刊)

- ・「園苑源流考」第5-181号, 明治23年(1890)-同38年(1906), 都合141回連載。(除く第10, 68, 79, 94, 96, 135, 136, 141, 143-147, 149-152, 154, 155, 157, 159, 161-164, 166, 168, 169, 171, 173-177, 180号)

日本園芸会雑誌 (明治22年4月創刊)

- ・「公園論」第47-51号, 明治26年・27年(1894)
- ・「大久保村躑躅花を覧るの記」第56号, 明治27年(1894)
- ・「霞か閨御園生の牡丹花拝見の記」第56号, 明治27年(1894)
- ・「奈良公園改修説并帝國奈良博物館苑池創造説」第63・64号, 明治28年(1895)
- ・「奈良公園改修説并帝國奈良博物館苑池創造説の絵圖に付き質問回答の願末」第66号, 明治28年(1895)
- ・「春秋園池記ノ事」第75号, 明治29年(1896)
- ・「海賊橋東詰ノ牧野候屋敷の園池」第76号, 明治29年(1896)
- ・「名園餘觀」第77-156号, 明治29年(1895)-38年(1905)
(除く98, 104, 106, 107, 111, 114, 116, 117, 119, 121, 154号)
- ・「木戸侯爵の庭園」第89号, 明治30年(1897)
- ・「香川県琴弾公園ノ設景」第94号, 明治33年(1900)

- ・「七松園」第148号, 明治37年(1904)
(明治38年7月第158号より「日本園芸雑誌」と改題)
 - ・「消暑清趣篇」第159号, 明治38年(1905)
 - ・「園林茶談」第163号, 明治39年(1906)
 - ・「日本古代の造園書に就て」第225号, 明治44年(1911)
 - ・「庭園に就て」第234号-第236号, 明治45年(1912)
- 園芸之友 (明治38年5月創刊)
- ・「庭園称谓の弁別」第1年1号, 明治38年(1905)
 - ・「庭園石燈籠並其建設場所に就きて」第2年1号, 明治39年(1906)
 - ・「跋石小話」第2年2号, 明治39年(1906)
 - ・「京都御所林泉図解」第2年3号, 明治39年(1906)
 - ・「庭園上の桜花観」第2年4号, 明治39年(1906)
 - ・「鉢前の制作」第2年5号, 明治39年(1906)
 - ・「うゑごみ名称と事実」第2年6号, 明治39年(1906)
 - ・「造園方の真行草に就きて」第2年12号, 明治39年(1906)
 - ・「庭園称谓の弁別に就きて」第4年5号, 明治41年(1908)
 - ・「大阪天王寺公園の興造」第6年1・2・3号, 明治43年(1910)
 - ・「日英博覧会の日本風林泉」第6年11-12号, 明治43年(1910)
 - ・「平安京指紳家の庭園造方」第7年1・2・4号, 明治44年(1911)
 - ・「平安京指紳家の園池に使用する龍頭鶴首船の記並に其典故」第8年7号, 明治45年(1912)
 - ・「曲水宴遊の源流紀述」第12年1-4, 9-12, 第13年6号, 大正5年(1916)-大正6年(1917)
- 建築工芸叢誌 (明治45年2月創刊)
- ・「大名の庭園」明治45年(1912)第1冊
 - ・「後楽園源流略記」明治45年(1912)第2冊
 - ・「庭園源流略志」明治45年(1912)第3冊-大正3年(1914)第24冊
- 著書
- ・「明治庭園記」: 明治園芸史 第6編: 日本園芸研究会, 大正4年(1915)
 - ・「山水並野形圖 古傳園方書 尺素往來跋抄」小澤編, 自費出版, 大正15年(1926)
 - ・雑誌掲載の論説・記事は、雑誌毎に掲載年の早いものから順番に「タイトル」, 掲載巻号数, 掲載年の順に記載し、また連載については、煩雑さを避けてまとめて掲載した。

(2) 小澤圭次郎の東京府立園芸学校講師就任

先の「庭園に就て」の中で、小澤(写真-1)は、明治44年(1911)5月に東京府立園芸学校長鈴木武太郎(写真-2, 1869-没年不詳)¹⁸⁾の依頼を受け、6月から当校生徒に講義をしていると記している¹⁹⁾。

東京府立園芸学校に於いて、小澤が講義を行うに到る具体的経

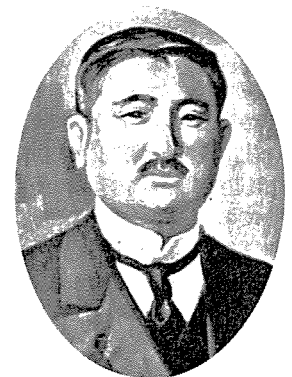
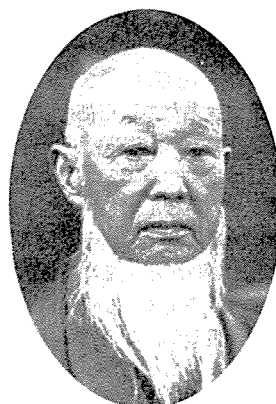


写真-1 小澤圭次郎肖像 写真-2 鈴木武太郎肖像

東京都立園芸高等学校同窓会編(1978): 東園の七十年: 東京都立園芸高等学校同窓会, 34p., 口絵)

緯は、今日まで知られていない。この経緯を知る手がかりは、唯一、小澤の日記(四十四年日記、東京都立園芸高等学校蔵)の記述のみである。(表-3)この記述から、小澤の府立園芸学校講師就任の具体的経緯を明らかにすると、次のようになる。

小澤と当校の関係は、鈴木校長が、小澤宅を明治44年(1911)4月25日に訪問したことに始まる。この最初の訪問の目的は、当校創立記念日(明治44年4月27日)及び日本園芸会夏期講習会での講演依頼であった²⁴⁾。鈴木は、再び5月18、19、20日の三日連続して、小澤宅を訪問している。この間の訪問により小澤の講師就任の受諾を得ている。5月18日午後、教諭宮澤文吾を伴い小澤宅を訪問、府立園芸学校の「日本庭園模範園」設景を打診する。翌19日、設景を正式に依頼、小澤はこれを、設景料200円、設景期間2週間で受諾している。更にこの日、新たに、生徒への庭園講義を、一年間40時間担当するよう打診している。翌20日夜、模範園の予算案作成を打診、前日打診の講義について、小澤は、毎月1回2時間ずつ年間24時間、年俸百円で受諾している。小澤の受諾を受けて、鈴木は、東京府に上申書²⁵⁾を提出、この上申書にもとづき、東京府は、明治44年(1911)5月31日付授業嘱託(講師)辞令を小澤に交付している。

鈴木は、府立園芸学校開校後間もない明治42年に校長に就任している。前校長熊谷八十三²⁶⁾の計画を引き継ぎ、施設設備の充実に努め、明治43年(1910)には、一部を除きほぼこの整備を終え、また、当校の教育に相応しい教員の採用にも努めていた。前述のように、鈴木は、明治43年(1910)8月に、庭園を含む担当教諭として宮澤の採用を果たしている。しかし宮澤の専門は、観賞園芸(花卉)で、庭園の専門ではなかった。したがって、この時期「庭園」担当に相応しい人材を未だ得ることが出来ない状況にあった。

鈴木は、創立記念日講演の内容として小澤に「庭園談」を要請している。当然のことながら、この講演内容を小澤に求めた際に、府立園芸学校での庭園教育の状況を話題にしたに違いない。小澤との初対面から、小澤に庭園講義講師就任の打診までに、約一月近くの時間を要している。これは、小澤との対談を通じて、庭園講義を小澤に依頼しようとする考えが、鈴木の中で固まるまでに時間を要したためであると推測できる。

なお、当校での小澤の講義回数について、かつての教諭宮地常助²⁷⁾は、「週一回ずつ」と記しているが²⁸⁾、5月20日の日記の記述から明らかなように、正確には、月1回2時間ずつ一年間合計24時間の誤りである²⁹⁾。

表-3 小澤日記にみる府立園芸学校講師就任の経緯

年月日	日記記述
明治44年4月25日	東京府技師、東京府立園芸学校校長鈴木武太郎来面ス、ニケノ願有ト云フ、明後廿七日朝、同校創立記念会式ヲ行フ、其後に生徒ヲ集メテ一場の庭園談ヲ談センコトヲ乞フ、諾之、八月中旬夏期講習日本園芸会にて庭園談ヲ乞フ、諾之、
同年 5月18日	后三半、鈴木武太郎、宮澤文吾兩人来話、日本庭園模範園ヲ校内ニ設景ニ付依頼有リ、只本日中ニ来月度、予算ニ組込ノ事ヲ云フ、問答マテ、
同年 5月19日	鈴木校長尋来云、模範苑池設景ヲ托スト、二百円ニテ二週間出来ヲ約ス、又学生ニ講義の事一学年四十時間也、此ヲ以テナを教授の事話アリ、考察相応ルコトヲ約ス、
同年 5月20日	夜、鈴木来云、設景予算経ンコトヲ乞、更ニ其報酬卅円位出サジバ、雖頼ノコト申ス、半諾ス、又我講義ハ、一学年ニ廿四時間、一月一回二時間なるにて、報

酬百円ニテ我之ヲ承ス。

同年 6月14日 八過、鈴木校長ヨリ一封来、前辞令手續違ニ付取替、東京府ヨリ直接ノ嘱託也、返事、古写前裁秘抄一冊郵送ス、

・明治44年小澤日記(東京都立園芸高等学校蔵)より講師就任の経緯に関する記述部分のみ抽出。

表-4 東京府立園芸学校学科程度毎週教授時数(1911)

科目	第1学年時数	第2学年時数	第3学年時数
終身	人倫道德ノ要旨 1	同 左 1	同 左 1
国語	講読、作文 3	同 左 3	同 左 3
英語	読方、訳解、文法、書取 3	同 左 3	同 左 3
数学	算術、代数、幾何 4	代数、幾何 3	
図画	自在画、用器画 2	同 左 1	
体操	普通体操 2	同 左 2	同 左 2
物理及氣象	物理及氣象 3	氣 象 1	
化学	無機及有機 3	同 左 2	
博物	動物及人身生理 2		
	植物 2		
	鉱物、岩石質 1		
病害虫		病害虫 3	
植物栄養土壤及肥料			植物栄養土壤肥料 3
農業土木及農具			農業土木及農具 1
作物	各論 2	各論及通論 2	
園芸通論及果樹		園芸通論及果樹 2	果樹 2
蔬菜		蔬菜 2	蔬菜 2
観賞園芸		観賞植物 2	観賞植物、温室管理及庭園 2
農産製造及果菜調理			農産製造及果菜調理 2
畜産			畜産 2
農業簿記		農業簿記 1	
経済及法規			経済学原論、農業経済、農業法規 3
合計	28	28	26
実習	動植物実験園場実習	動植物実験園場実習 温室実習 手芸実習	化学実験園場実習 温室実習 農産製造及果菜調理実習 園場実習

・本表は、明治44年(1911)3月16日制定の「東京府立園芸学校學則」第9条掲載の表を横組に改めた。数字は、毎週教授時数。(警視庁東京府公報、第1683号、東京府令第26号明治44年(1911)3月16日)

3. 小澤次郎の庭園講義

(1) 東京府立園芸学校の教育課程に於ける「庭園」の位置づけ
前述のように、鈴木校長の招聘により、小澤は明治44年(1911)府立園芸学校の庭園講師に就任する。小澤が講師として担当することとなった庭園の教育課程上の位置づけを概観すると、次のようになる。

創立時に時の教育課程上での庭園の位置づけは、3年生履修の学科目「園芸」の教育内容の一つであった。明治44年(1911)3月の学則変更に伴い、その教育課程の変更がなされ、学科目「園芸」は、「園芸通論及果樹」、「蔬菜」、「観賞園芸」の3学科目に分科された。つまり創立時教育課程において学科目「園芸」の教育内容として掲げられていた、2年生履修の「通論、果樹」、3年生履修の「果樹、蔬菜、観賞植物、庭園、温室管理、果菜調理」を、それぞれ新たに学科目として独立させたのである。この改正によ

り、「庭園」は、学科目「観賞園芸」の3年生2時間履修の教育内容、具体的には観賞植物、温室管理、庭園の一つとして位置づけられ、果菜調理については、学科目「農産製造」に含ませ学科目「農産製造及果菜調理」に変更している。(表-4)

(2) 東京府立園芸学校に於ける小澤の庭園講義開始

前述のように小澤の府立園芸学校の庭園講師就任は、東京府の辞令交付日の、明治44年(1911)5月31日であった。この講義開始の具体的日時については、小澤日記(四十四年日記、東京都立園芸校高等学校蔵)の記述から知ることが出来る。明治44年(1911)6月21日(水)の項に、「廿一日 陰、四時起六時出、本朝ヨリ無事出校、九時ヨリ十一時迄講堂ニテ前裁秘抄十枚斗話説ス」と記述しているからである。小澤がこの日に講義を開始するに到った経緯は、鈴木の小澤宛書簡²⁹⁾から知ることが出来る。明治44年6月13日付小澤宛書簡で、学校の都合上、小澤の講義時間を水曜日の午前9時から11時までの2時間と定め、小澤の講義開始の日を6月21日か28日両日のどちらがよいか、その都合を問合わせている。翌14日、小澤はこの書簡を受け取ると折り返し返書と謄写印刷のための原稿として「古写前裁秘抄」1冊を鈴木宛に郵送している。つまり、鈴木がその書簡で指定した上記二日の内、6月21日(水)に講義開始となったのである。小澤、齢69歳のことであった。

(3) 小澤圭次郎による庭園講義の内容

小澤は、東京府立園芸学校での講義の内容について講演記録「庭園に就て」の中で「日本造園の方書を、學生諸君に向て、講義致し居ります、」と記している²⁷⁾。この記述に明らかのように小澤の「庭園」講義は、「日本造園の方書」についての講義であった。この「日本造園の方書」とは、具体的何を指すのか、またどの程度の時間をこれの解説に費やしたのか、これを知る手がかりは、小澤の日記の記述のみである。小澤の明治44、45年日記(東京都立園芸高等学校蔵)の記述から、初年度(明治44年度)の小澤の講義内容とその時間をまとめると次のようになる。

前述のように、小澤はその講義を、明治44年(1911)6月21日の「前裁秘抄」の解説から始めている。また、9月21日には、翌月からの講義に備えて、増圓撰「最古園方書」1冊を謄写版印刷の原稿として府立園芸学校に提出している。12月6日には、この園方書(「増圓哲書」)の講義を終了している。10月11日から12月6日までの4回にわたって、この「最古園方書」を教材に講義を行ったことになる。更に、11月8日、府立園芸学校へ赴き、3学期の講義に備え、「園書無名巻」を謄写版印刷の原稿として提出している。翌年明治45年(1912)1月17日から3月6日までの4回にわたって、「園書無名巻」の講義を行い、最後に伝授系図について講義を行っている²⁸⁾。

以上のことから、小澤による初年度の庭園講義は、合計12回行われ、初めの4回(8時間)を「前裁秘抄」の解説に、次ぎの4回(8時間)を増圓撰「最古園方書」の解説に、最後の4回(8時間)を、「園書無名巻」の解説にそれぞれ充て、講義の最後に「伝授系図」の解説をして、初年度一年間の講義を全て終了したことになる。この講義方法は、この講義開始以来、昭和6年(1931)3月の講師退任まで、変わることはなかった。

(4) 小澤の庭園講義に対する基本的態度

前述の通り、東京府立園芸学校に於ける小澤の庭園講義は、「日本造園の方書」を教材に行われた。小澤が庭園講義の教材に「日本造園の方書」を用いた理由は、講師就任に先立つ明治44年(1911)4月27日、府立園芸学校創立記念日の小澤の講演記録「日本古代の造園書に就て」²⁹⁾の中で明らかにされている。本講演記録冒頭部分で、明治維新後に刊行された造園書について、この著者が、古代園方書の把握をしていないため、その内容が取るに足りないものと批判し、更に、江戸時代に刊行された「築山庭

造傳」、「築山庭造傳後編」三巻、「石組園生八重垣傳」二巻について、これら刊行書に説かれている庭造法の「真行草」について、これは書体の区別であり庭造法には全く関係がないと退け、園石の形状の名称として用いられている「律呂」についても、これは声音上の題目で、造庭には全く関係のないものであるとし退けている。つまり、これらは、古代園方書にはない、単なる僻説すぎないと断じているのである。またこの僻説の出所について、今日嵯峨流古法秘伝之書と呼ばれる応永年間の奥書がある造園書に、初めて出現したもので、築山庭造伝以下、不学無識の著者が、これらの僻説を鵜呑みにして無批判にその著書に採り入れたものであると語り、本講演の最後を「新刊の造園書を讀で、其得失を辨知せんと欲するには、古代園方書の涉獵を終らざれば、できません譯で有ます。」と結んでいる。

明治維新後出版の造園書は、江戸時代刊行園方書(「築山庭造伝」、「築山庭造伝後編」、「石組園生八重垣伝」)に範を取っているが、江戸時代刊行園方書以前の古代園方書の内容を把握していないため取るに足らない内容となっている。そこで新刊の造園書の内容の真偽を判断するために、また、僻説の出所を知るためにも、古代園方書の内容を知る必要があると主張しているのである。つまり、物事の真偽を判断するには、その原点を知らなければならないと主張しているのである。まさにこの主張こそ、府立園芸学校に於ける庭園講義に対する、小澤の基本的考えであった。

なお、小澤は「造園の方法を記した書」の名称として、雑誌「国華」連載の「園苑源流考」(明治26年(1893))の中では、「造園ノ方書」、「園方書」を用い³⁰⁾、上記「日本古代の造園書に就て」(明治44年(1911))に於いては、「造園書」、「園方書」を用い、『明治園芸史』掲載の「明治庭園記」(大正4年(1915))では、「造園方法書」、「園方書」の名称をそれぞれ用いている³¹⁾。つまり、小澤は、「造園の方法を記した書」の総称として、これら各名称を用い、江戸時代刊行以前の園方書を他の園方書と区別して、特に「古代園方書」または「古伝園方書」と称していたのである。

4. 小澤圭次郎が庭園講義教材に用いた園方書

前述のように小澤が東京府立園芸学校で講義の教材として用いた園方書は、「前裁秘抄」、増圓撰「最古園方書」、「園書無名巻」の3冊である。これら園方書は全て、小澤が私財を投じて自ら収集した資料と、他家所蔵の写本とを校合・校訂して、冊子として作成したものである。

(1) 前裁秘抄 一名作庭記

小澤日記、明治44年6月14日の記述にある、謄写版印刷の原稿として東京府立園芸学校に郵送した「古写前裁秘抄」とは、現在東京都立中央図書館加賀文庫に収蔵されている、小澤手写「前裁秘抄 一名作庭記」(38丁、写真-3、今日一般に作庭記と呼ばれる)である。

本冊子跋によれば、本冊子作成のために校合・校訂に用いたものは、自蔵の刊本作庭記(群書類従362遊戯部所収)、同古写本三種と、他家から借覧した山水抄三巻とである。中でも、山水抄三巻は、本冊子作成に大きな役割を担っていた。

小澤が明治25年(1892)2月に作成した冊子「山水抄 上中下三巻」³²⁾の序には、この山水抄を手にした経緯とその校訂の経緯並に本冊子との関係を記している。この序の記述と、小澤の明治25年日記(東京都立園芸高等学校蔵)の記述から、これらの経緯をまとめると、次のようになる。

山水抄三巻は、東京帝国博物館が、明治25年(1892)1月に小筆家から借りだし、同館理事山高信離(1842-1907、この時期、帝国博物館館長を経て同館理事の職にあった)、本書の鑑定を小澤に依頼するため、川崎千帛(1835-1902、明治期の画家、この

時期帝国博物館御用掛)に命じて、明治25年(1888)1月27日、小澤宅に届けさせたものである。この、2日後1月30日には、小澤は、この写本を終え校訂加朱に着手、翌31日にはこの山水抄三巻と、作庭記の著者についての弁妄を完成させ、翌月2月1日には、鑑定結果を添え、川崎に返却している。翌2月2日には、跋を記し、2月4日に、山水抄三巻校訂を終了している³³⁾。

「前栽秘抄 一名作庭記」跋の記述によれば、本冊子は、先の山水抄三巻の校訂終了後、この山水抄三巻と作庭記とを対照考校し、作庭記の誤字脱言を山水抄三巻によって校訂し、明治25年5月に本冊子「前栽秘抄 一名作庭記」の作成を終えたことになる。

また、山水抄三巻との対照考校の過程で、作庭記の作者が、後京極摂政良経(藤原良経 1169-1206)ではなく、伏見修理大夫橋朝臣(橋俊綱, 1028-1094)であることを山水抄下巻末尾の記述から知ることが出来たとして、本冊子「前栽秘抄 一名作庭記」跋に次のように記している。「予此書熟玩の後に、決然此書は、後京極摂政良経公の著作に非ずと断言せり、然らば、此書は何人の著作に属するもとかと、云ふに、此は伏見修理大夫橋朝臣が、園事見聞日記なる事を、山水抄^註の末尾に於いて、知得したり」作庭記の著者を、橋俊綱としたのは、小澤をもって嚆矢とすることができる。

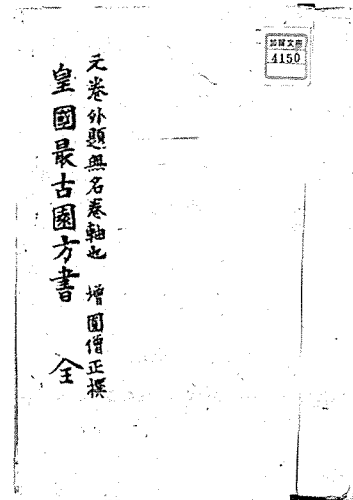


写真-4 「元巻外題無名巻軸也 増圓僧正撰 皇國最古園方書全」表紙 加賀文庫蔵、都立中央図書館蔵

て記している。本冊子の序及び小澤日記の記述³⁴⁾から、「増圓僧正撰 皇國最古園方書 全」の校合の経緯及びその時期をまとめると次のようになる。

明治25年(1892)1月29日、小澤は、前田侯爵記家の友人野口之布(1830-1898)に「京後京極殿作庭記二巻」の借覧依頼をする。この依頼は、作庭記が紛失して見つからず果たせなかったが、代わりに増圓撰「古文書」一巻が、野口によって探し出され、これを見てはどうかとの誘いを受ける。2月8日、前田侯爵邸内野口宅にて、前田侯爵家蔵一巻を借覧し、自蔵巻は前田侯爵家で作成された副本二巻の内の一、すなわち模巻であると確認、翌月3月14日再度、野口宅にて自蔵模巻との校合を終了している。この後、小澤は、明治26年(1893)、この全文を、国華に連載中の「園苑源流考」³⁵⁾に、初めて掲載している。

国華掲載の翌年、明治27年(1894)4月14日の「向島大火」によって自蔵模巻を焼失する。焼失の翌年明治28年(1895)に、逆に国華に掲載した全文を写し取り、本冊子を作成している。この自蔵模巻焼失から本冊子作成までの経緯を、本冊子序に「二十七年甲午、四月十五日、向島大火の時に我家は延焼して、此副本も烏有となりたり、然るに、先是、國華第四十八號廿六年九月刊行以下、第四十九號、第五十號に、此書を抄して、分載し置きたるゆゑに、更に是を國華より寫取りて、一冊子と為し、之を讀む者の便益に資するが為めに、句讀を點し、返點を施し、尚且行間に漢字義譯を挿記して、以て皇國最古園方書と題簽すと云爾、明治二十有八年三月、醉園子、本郷僑、駒込、神明町三百四十七番地僑寓、天雀堂西窓の下に識す」と記している。この序末尾の記述から本冊子は、明治28年(1895)3月に作成されたことになる。

しかし、小澤日記の明治44年(1911)9月20日には「最古園方書、序跋成、浄写ス」との記述があることから、明治28年(1895)3月に作成した冊子に、府立園芸学校の講義教材とするため、新たに序・跋を附して完成したものが本冊子となる。つまり、本冊子が最終的に完成したのは、上記序末尾記載の日ではなく、明治44年(1911)9月20日となる。したがって、本冊子の序、跋も実際に書かれたのは、序跋末尾記載の時期ではなく、明治44年(1911)9月20日となる。

また、本冊子跋末尾に「明治二十六年、二月中浣、墨江東畔、受地坊、秋葉祠南ノ淡静廬南軒ニ識ス、醉園居士小澤圭」と記していることから、焼失前に本巻の校訂を終えた時期は、明治26年(1893)2月中浣(中旬)であったことがわかる。

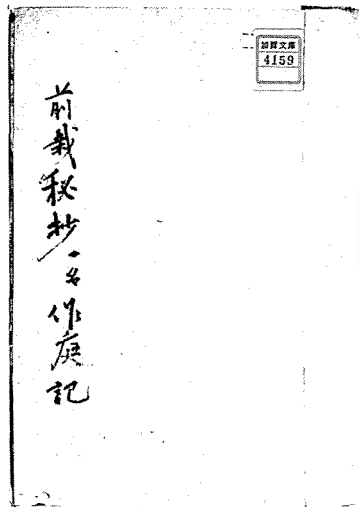


写真-3 小澤手写「前栽秘抄 一名作庭記」表紙 加賀文庫蔵、都立中央図書館蔵

(2) 増圓撰 最古園方書 (山水并野形図)

明治44年(1911)9月21日、謄写印刷原稿として府立園芸学校に提出した冊子が、東京都立中央図書館加賀文庫蔵の「元巻外題無名巻軸也 増圓僧正撰 皇國最古園方書 全」(44丁、写真-4)である。本巻は巻首に「山水并野形図 増圓撰」と記されていることから後に「山水并野形図」と呼ばれるようになる。

本冊子作成のために小澤が校合・校訂に用いたものは、自蔵の模巻一巻とその元巻となる前田侯爵家蔵の信嚴法印(1420-1504)自筆一巻とである。本冊子跋には、本巻を作庭記に先立つ我が国最古の園方書と決定するに到った理由を、次のように記している。「按ルニ、増圓僧正撰術ノ園方書ハ、皇國ニ於テ、造園ノ方法ヲ論説シタル嚆矢ト謂フ可キ者ナリ、巻中記載ノ山水園、野筋様ヲ始メ、池沼ノ淺深、魚鳥ノ放養、草木ノ種藝培植、并ニ立石・臥石ノ名目形状、曲山・曲木、曲河・曲石等ハ、未タ作庭記、^註山水抄ニ掲載セサル所ニシテ、其末尾ニ表出セシ、授受系統ヲ一讀スレバ、則チ夏ニ前古ノ著書タルコト、論辨ヲ俟タズシテ明白ナリ」上記理由から、本冊子の表題を「皇國最古園方書」としているのである。

本冊子の序には、前田侯爵家蔵の元巻を借覧にするに到った経緯、及び自蔵巻がこの副本(模巻)であると確認した経緯につい

(3) 園書無名巻 (嵯峨流古法秘伝之書)

明治44年(1911)11月28日、謄写印刷の原稿として東京府立園芸学校に提出した冊子が、東京都立中央図書館加賀文庫収蔵の「夢窓流 假山制作之規 全」(15丁、今日一般に嵯峨流古法秘伝之書と呼ばれる、写真-5)である。

本冊子末尾には、日付の異なる跋が、2種類付されている。明治28年(1895)春の跋と、明治44年(1911)11月の跋である。小澤は、本冊子を日記に「園書無名巻」と記述しているが、その理由は、明治28年(1895)春の跋に、「斯篇ハ、假山制作之規、夢窓流。ト云ヘル題名ヲ掲記スレドモ、其根元ヲ搜索スレバ、全ク元巻ハ、無名ノ巻物ニシテ、作者ノ姓名モ詳ナラザル者ナリ」と記していることからわかる。

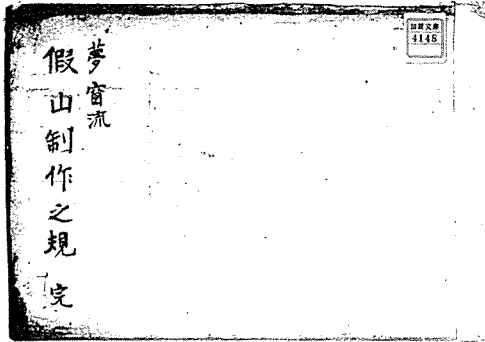


写真-5 「夢窓(窓)流 假山制作之規 全」表紙 加賀文庫収蔵、都立中央図書館蔵

明治44年(1911)11月の跋文から、小澤が本冊子作成のため校合・校訂に用いた書巻は、自蔵の「夢窓国師築山秘書並圖」1冊、「假山制作之規 夢窓流」一冊、「庭坪築形傳書 山水夢想国師傳」1冊、並に東京帝國博物館所蔵「秘傳造庭巻」1冊であった。上記にもあるように、これらは同一内容でしかも奥書に「應永二年八月廿二日中院中納言康平寫之 文明七年三月七日四條權中將藤為明前從三位重範公ヨリ傳之寫之」との記述があることから、各自が都合のよい題名つけたものに過ぎない。

同跋には、この「園書無名巻」と江戸時代の刊本園方書との関係について次のように記している。「一略一然ルニ、造園ノ方法ニ、眞、行、草、ノ區別ヲ立テ、又立石ノ方ニ於テ、二祥、三吉、三忌、五禍ノ、説、並ニ律、呂、石ノ説ヲ設定シ、且又、諸佛菩薩ノ名ヲバ、起石、臥石、等ニ配當シタリシ事ナドハ、願フニ狡猾ナル、凡俗俗僧ノ手ニテ編述セシヤ知ル可キナリ、書末ニ、夢窓國師云ト書キシ所有リ、又奥書ニ、應永二年、八月廿二日、中院中納言康平、寫之ト有ルヲ以テ、攻究スレバ、足利將軍家ノ二代、若クハ三代ノ際ニ、作成シタル者ト見ヘタリ、蓋シ後世刊本ノ、築山山水傳、築山庭造傳、後篇築山庭造傳、石組園生八重垣傳等ノ諸書ハ皆此書ヲ剽竊セン事、歴々トシテ之ヲ徴知ス可キナリ。」

また、同跋末尾には、「明治四十四年辛亥、十一月、東京府立園藝學校、第三期生徒ニ、授讀ノ為メニ、鈔録ス、巖野君七十叟小澤圭次郎識。」と記し、本冊子は、府立園芸学校の教材として作成されたものであることを明示している。

本冊子には、明治28年(1895)春の跋が掲載されていることから、明治28年には、本冊子はすでに作成されていたが、新たに、明治44年(1911)11月の跋を末尾に加え完成させたこととなる。小澤日記(東京都立園芸高等学校蔵)の同年11月28日には、「早、園芸校へ行、無名巻園方書写修ス」と記述していることから、本冊子の完成は、具体的には11月28日となる。

(4) 傳授系圖

明治44年(1911)度講義最終日に解説した「伝授系図」とは、園方書伝授の系図と園方書の記述内容がどう受け継がれたかをま

とめて系図としたものである。この系図には、印刷された3種類と小澤の自筆系図との4種類がある。

印刷された系図は、明治26年(1892)「園苑源流考」に「園方書傳來系圖」⁹⁶⁾として掲載され、『明治園芸史』所掲の「明治庭園記」には「造園方法書傳統系圖」⁹⁷⁾として、また、大正15年(1926)頒布用につくられた謄写印刷の小冊子(写真-6)末尾に「造園方法書傳統系圖」⁹⁸⁾としてそれぞれ掲載されている。

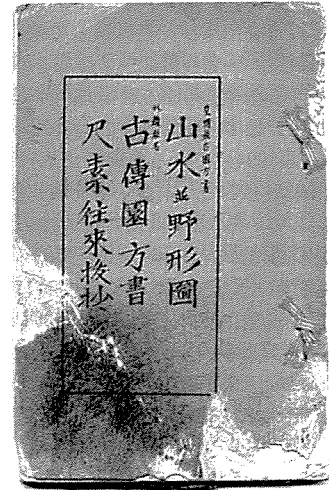


写真-6 「山水並野形圖 古傳園方書 尺素往来跋抄」表紙 大正15年(1926)4月発行、東京都立園芸高等学校蔵

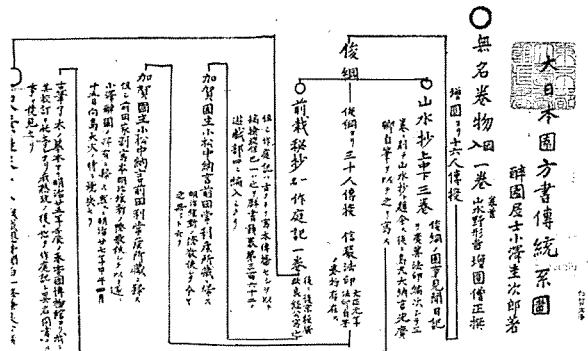


写真-7 小澤圭次郎著「大日本園方書傳統系圖」冒頭部分 加賀文庫収蔵、都立中央図書館蔵

また、手書きのものは、現在、東京都立中央図書館加賀文庫に収蔵されている、小澤著「大日本園方書傳統系圖」1枚(写真-7、1尺×4.4尺)である。これには、作成期日の記述がないので、その時期を直接に知ることはできないが、「外題無名巻物 圖入一卷 作者缺名 の項」に林旅所蔵の「箱書 山水庭石秘傳」(明治45年夏購入)が、掲載されていることから、その制作時期は、明治45年(1912)夏以前に遡ることはできない。

手書きの「大日本園方書傳統系圖」と印刷された前記3種系図を比較すると、その題名に「傳統系圖」の名を用いていること、記載内容が「明治庭園記」掲載の「造園方法書傳統系圖」に近いものであること、更に、大正3年(1914)日記(東京都立園芸高等学校蔵)の8月30、31両日に「園書系図ヲ作ル」との記述があることから、本系図は、「明治庭園記」掲載のために、この時期に制作されたものと考えられる。

上記4種の制作時期から考えて、小澤が初年度講義最終日に説明した「伝授系図」は、国華掲載の「園方書傳來系圖」にその後の知見を加え、「明治庭園記」掲載の「造園方法書傳統系圖」に近い内容のものであったと、推測できる。

5. 小澤圭次郎の庭園観及び造園教育観

小澤は、造園研究のかたわら、明治44年(1911)6月21日の講義開始以来、死去(昭和7年(1932)1月12日、急性肺炎にて死亡)前年の昭和6年(1931)3月まで20年間府立園芸学校に於いて教鞭を執り続けた。小澤がこのような長期にわたって造園教育に携わったのは、自らの造園研究の過程で培った確固たる庭園観、造園教育観がなければ、とうていなし得ない。このことは、磯村春夫(府立園芸学校大正15年卒)が証言している、「俺が死んだら日本庭園は闇だ」との小澤の発言³⁹⁾からもわかる。小澤の庭園観及び庭園教育観については、学校長鈴木の依頼によって設景した東京府立園芸学校園池の解説書『東京府立園藝学校園池解説』の草稿の中に記されている。ここでは、この草稿をもとに、小澤の庭園観、造園教育観を明らかにする。

(1) 小澤圭次郎の庭園観

「園林茶談」⁴⁰⁾の中で、小澤は、我が国の造園の本質を、「元來、山水庭は、天然山海の景色を本として造り、平庭は、原野の風景を形どるものである。」と記し、更に「欧米諸國はいざ知らず、我が國の造園は、自然を師とすれば足れりである。」と記している。

つまり、我が国の造園の本質は、自然を範とするもので、「山水庭」のものは、自然の山や海の風景であり、「平庭」のものは、原野の風景にあるということである。また、明治44年(1911)5月18日、学校長鈴木の依頼による「日本庭園模範園」の解説書、『東京府立園藝学校園池解説』の草稿⁴¹⁾「総論」の中で、造園の方略(設景方法)は、「山水」、「枯山水」、「平地立石」の三種に帰結するとして、「造園の方略は、多種多様にして、窮極無しと雖も、古傳園方書に據りて、之を大別すれば、則ち唯三種に帰す、而して俗書の眞・行・草などいふ三區別は、毫も關係なしとす、三種とは何そや、曰く山水、曰く枯山水、曰く平地立石、是なり、山水とは、池を穿ち水を湛へ、山を築き石を立る者にて、後世の築山泉水造の事なり、枯山水とは、池も無く、遣水も無き處に、石を立て山を築くの造方なり、平地立石とは、山も無く、野筋も無く、平地に石を立るものにて、後世の平庭造の事なり」と記している。

これら記述から、古伝園方書研究を通じて、小澤は、我が国の造園は、自然を範とし、その設景方は、山水(築山泉水造)、枯山水、平地立石(平庭造)の三種に帰結するとの明確な庭園観を有していたことが、明らかとなる。

(2) 小澤圭次郎の造園教育観

上記『東京府立園藝学校園池解説』の草稿の中で、当時の造園業界が、ただ経験に流れ、その技術の学芸研究を怠っていると、「從來植木職共の仲間の中にて、少しく庭園經營の業に長せし輩は、庭師と自称して、園池の設景を為し、又は其興造を擔仁して、世人が林泉の需要に応じて、大小に幾多の庭園を作成せり、其手腕に至りては、頗る巧妙を極めし者も多からずとせず、然れども、斯技術を学芸上に講演し得る者は、未だ曾て一人も之有ざるなり、」(1丁表)と痛烈に批判している。この現状に対し当校の造園教育の目標は、学業と実際の庭園興造との一致に置くべきであるとして「抑も本校に於て、第三学年の中に、庭園の一科目を設置せられたるは、斯学年間に在て、生徒をして庭園經營上の学業を講習せしめ、卒業後に之を実施する際に臨みて、其学業を事実と、齟齬するの処無からしめんが為めなる可し」(2丁表)と記している。更にこの目標達成のためには、実際の庭を見、その景觀構成、各要素の配置を理解させる必要があるとして「故に是非とも実地に就きて、山と池との照応を始め、花木の按排、岩石の布置より、徑路開通の縦横曲折、橋梁架設の高低連絡に至るまで、一一之れが指示面論を為し、隨て是等品類の異状殊形に准して、景物の變化を生來し、園趣の存没を轉換すべき、主旨要領を講究會得せしむる事」(2丁裏)が必要であると強調している。つまり、小澤は、造園教育の目的を、卒業後理論的裏付けをもって実際に庭を興造する能力を養うことに置き、この目的達成のために、学業と同時に実物の庭での造園教育が欠かせないと主張しているのである。

この主張こそ小澤の抱いた造園教育観に他ならない。小澤の庭園観、造園教育観に基づいて、実際に設景されたのが、東京府立園芸学校園池であり、その具体的内容は、「東京府立園藝学校苑池成景圖」(下書き、図-1)と「東京府立園藝学校園池指図」(明治四十四年六月成 小澤手控、図-2)と、に反映されている。この中で注目すべきことは、平地立石(平庭)部分は、その場にふさわしい草花植栽の実習場としても使用することを想定していることである(7丁裏)。理由は不明だが、小澤の設景した本園池は、実際には作られることが無く幻に終わっている。明治45年(1912)から実施された、春秋2回の「庭園視察」では、小澤は視察現場で各庭園について詳しく解説を行っている。これは、小澤の学業と同時に実物の庭での教育が欠かせないとの教育観を実践したためだといえよう。

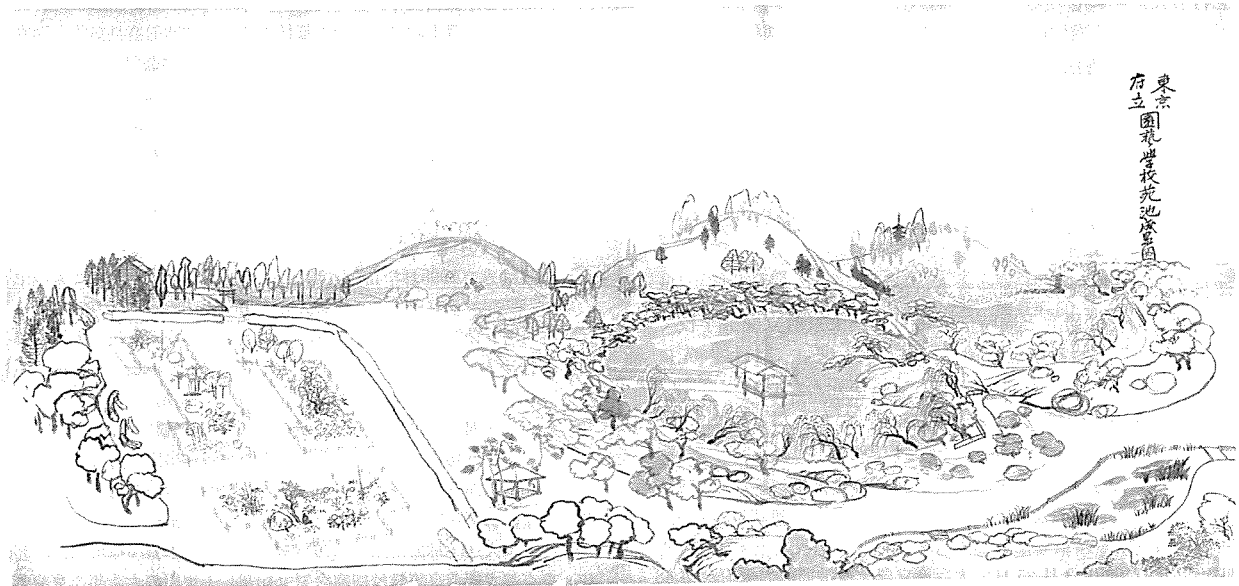


図-1 小澤自筆東京府立園芸学校苑池成景圖 東京都立園芸高等学校蔵(原図サイズ 650×1345mm)

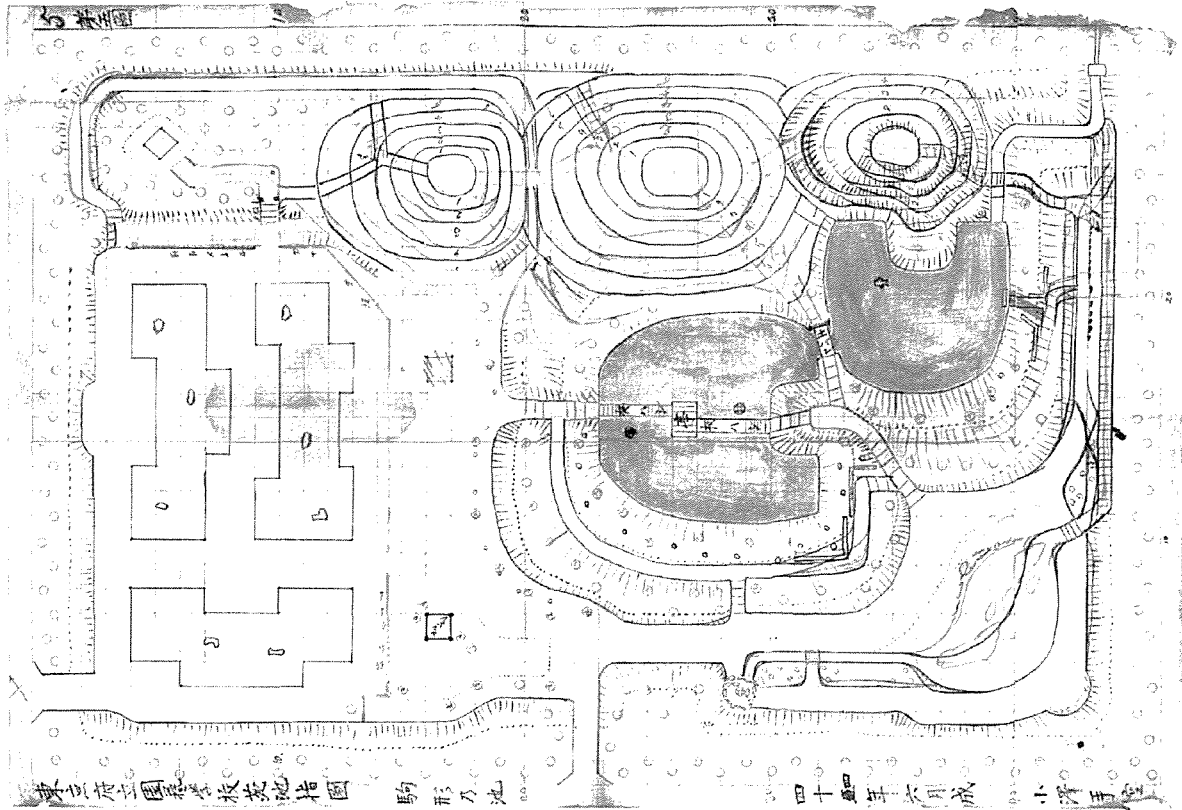


図-2 小澤自筆東京府立園芸学校池指図 東京都立園芸高等学校蔵 (原図の縮尺1:100 グリッド幅1間で作図, 原図サイズ595×865mm)

6. まとめ

明治41年(1908)4月開校の東京府立園芸学校に於いて学科目「園芸」の教育内容の一つとして、「庭園」が教育課程に明記された。これが我が国の農業学校に於いてその教育課程に造園教育が位置づけられた始まりである。この講師として、二代学校長鈴木武太郎は、当時最も著名な造園家小澤圭次郎(酔園)を招聘した。小澤は、この「庭園」講義を明治44年(1911)6月21日午前9時に開始し、自ら校合・校訂して作成した「前栽秘抄」(作庭記)、「最古園方書」(山水并野形図)、「園書無名巻」(嵯峨流古法秘伝之書)の古伝園方書を教材として、一年間12回庭園教育を行った。

教材として、古伝園方書を用いたのは、自己の造園研究を通じて、我が国の造園方法を正しく理解するには、古伝園方書の理解こそが必要であると確信していたからである。この姿勢は、講義開始以来、その職を辞するまで変わることはなかった。また、講師招聘と同時に、学校長鈴木からの依頼により、当校の園池設景を託される。小澤はこの園池を、自らの庭園観及び造園教育観を現実しようとの意図で設景を行ったが、この設景は、その実現を見ることはなかった。

小澤は、農業学校での造園教育の草創期から死の前年まで、その晩年を自己の造園研究と同時に、毎月1回東京府立園芸学校での講義に20年間変わる事無く情熱を注いでいる。これは、先に引用した教え子磯村春夫の証言にある「俺が死んだら日本庭園は闇だ」との小澤の強い自負と強固な信念あったからだといえよう。

補注及び引用文献

- 1) 横井時敬(1905)：園芸学校設立の必要：日本園芸会雑誌第157号, 1-7
- 2) 明治42年(1909)3月25日, 大阪府立農学校学期, 大阪府令第38号第3章掲載の課程授業時数表に, 学科目「園芸」第3年級5時間履

修の教育内容, 具体的には果樹, 促成温室, 庭園, 盆栽の一つに「庭園」が設定されている。

- 3) 千葉県立園芸専門学校学則第3章第7条学科課程表, 明治43年5月31日, 千葉県令第49号
- 4) 上原敬二(1983)：この目で見た造園発達史：この目で見た造園発達史刊行会, 51p.
- 5) 東京府立園芸学校学則第9条掲載教育課程及毎週教授時数, 明治41年(1908)3月12日, 東京府令第27号
- 6) 宮澤文吾(1884-1968)明治43年7月東京帝国大学農科大学農学科卒。卒業後すぐ, 東京府立園芸学校教諭に就任。東京府立園芸学校教諭在任期間は, 明治43年(1910)8月6日から大正元年(1912)12月16日神奈川県農事試験場技師へ転任まで。
- 7) 宮澤文吾の次女, 宮澤スミエ氏は, 東京府立園芸学校教諭在任時期の記録の有無についての筆者の問い合わせに対して, 筆者宛手紙(平成19年(2007)11月8日付)の中で「昔の日記の類は, 大正12年関東大震災の時, 横浜にて全焼し, 大正12年以前のものをすべて失いました。」と記されている。
- 8) 西村公宏(1991)：札幌農学校におけるランドスケープガーデニング, 造園雑誌54(5), 37-42
- 9) 小林治人(1995)：酔園小澤圭次郎 伝統庭園庇護・継承に生きた「設景家」, ランドスケープ研究58(3), 245
- 10) 吉川需(1994)：圭次郎(酔園)の詩学研鑽, 庭園復刊第5号, 16-18
- 11) 小林治人(1995)：酔園小澤圭次郎 伝統庭園庇護・継承に生きた「設景家」, ランドスケープ研究58(3), 246
- 12) 小澤圭次郎(1911)：庭園に就て：日本園芸雑誌第234号, 30-31
- 13) 上原敬二(1979)：談話室の造園学：技法堂出版, 31p.
- 14) 小澤圭次郎(1890)：園苑源流考：国華第5号, 2
- 15) 上原敬二(1979)：談話室の造園学：技法堂出版, 32p.
- 16) 福羽逸人述, 林旅筆記(1976)：園藝論：日本公園緑地協会, 56p.
- 17) 東京都立園芸高等学校同窓会編(1978)：東園の七十年：東京都立園芸高等学校同窓会：34-35p. なお, 本引用文中にある庭園視察は, 小

澤日記 (大正十四年酔園日誌, 東京都立園芸高等学校蔵) によれば, 大正 14 年 (1925) 5 月 6 日 (水) に実施された。

- 18) 鈴木武太郎 (1869-没年不詳, 明治 25 年東京帝国大学農科大学農学科卒, 農商務省勤務, 軍務, 山口県立農業学校長を経て, 明治 42 年 (1909) 8 月 1 日東京府立園芸学校第二代学校長に就任, 大正 6 年 (1917) 5 月 19 日東京府立農林学校長に転出。
- 19) 小澤圭次郎 (1911) : 庭園に就て: 日本園芸雑誌第 234 号, 30-31
- 20) 明治 44 年 (1911) 4 月 27 日の東京府立園芸学校の創立記念日の講演は, 宮澤文吾によって筆記され, 小澤の校正をへて「日本古代の造園書に就て」として「日本園芸雑誌」に掲載されている。(小澤圭次郎 (1911) : 日本古代の造園書に就て: 日本園芸雑誌第 225 号, 1-6) この講演会について小澤は日記 (四十四日記, 東京都立園芸高等学校蔵) に次のように記している。「廿七日 陰, 早起, 六半出, 八時至駒澤, 迎人輩来在, 即東京府立園芸学校へ行, 鈴木校長室ニ入対語, 九時半講堂ニ出, 学生百四十餘名列座, 我日本最古造園方書, 殊作庭記後京極撰政作ニ非サル旨説明ス, 十時半過了校長室ニ退キ午餐ヲ受ク, 校長同食, 教諭宮澤文吾草記ス我書写ヲ校正スルヲ約ス, 報酬受, 二時校ヲ退ク, 五時帰宅。」(句読点は, 筆者)
- また, 日本園芸会夏期講習会での講演は, 本講習会初日, 明治 44 年 (1911) 8 月 15 日午後「白須甲斐守の別荘新脩の時の空前名案及小石川植物園並砲兵工廠内後楽園の歴史」と題して約 2 時間の講演を行ったと記録されている。また, 本講集会六日目 8 月 20 日には, 千葉県立園芸専門学校校長鏡保之助による講演「日本庭園の特質及其変遷」もなされている。(日本園芸雑誌第 228 号, 63-64)。小澤のこの日の日記(四十四年日記, 東京都立園芸高等学校蔵)には, 「十五日朝三時ヨリ草稿着手, 白須草稿直, 浄写, 早午, 早稲田大学講堂へ行, 園芸会夏期講習会, 白須別荘講話ス。」(句読点は, 筆者) と記している。
- 21) 鈴木が東京府に提出した上申書 (明治 44 年, 第 1 類・文書類纂・学事第 9 類・府立学校職員第 3 巻収載, 東京都公文書館蔵) の記載は, 次の通りである。

囑託教員任命ノ儀上申
東京府平民

小澤圭次郎

右者庭園ニ関スル授業ヲ囑託致度ニ付御任命ノ上年手
當金百円給與与相成度別紙履歷書相添此段上申候也
明治四十四年六月八日

東京府立園芸学校長鈴木武太郎 印

東京府知事阿部浩殿

追テ五月三十一日付ヲ以テ任命相成度候

- 22) 熊谷八十三, 明治 33 年 (1900) 東京帝国大学農科大学農学科卒, 府立園芸学校長在任期間は, 愛知県立農林学校教諭から転じて, 明治 41 年 (1908) 2 月 23 日初代学校長に就任から, 明治 42 年 (1909) 7 月末農商務省農事試験場興津園芸部技師に転出まで。
- 23) 宮地常助 (1894-1978), 大正 12 年 (1923) 東京帝国大学農学科卒, 府立園芸学校教諭在任期間は 大正 12 年 4 月から昭和 11 年 (1936) 6 月都市計画北海道地方委員会技師転出まで。
- 24) 東京都立園芸学校同窓会編 (1978) : 東園の七十年: 東京都立園芸高等学校同窓会: 33
- 25) 小澤の講義回数については, 東京府立園芸学校講師在任期間の明治 44 年 (1911) から昭和 6 年 (1931) まで間の現存する日記 (昭和 4 年 (1929) と 6 年 (1931) を除く, 東京都立園芸高等学校蔵) の記述を確認した結果, 一年 12 回であった。
- 26) 鈴木の明治 44 (1911) 年 6 月 13 日付け小澤宛書簡(東京都立園芸高等学校蔵)の全文は以下に示す通りである。
二仲, 先般ご送付致し辞令書ハ手續上の錯誤有之候に付今回添送の分と御交換被下度候也
拝啓, 先般来設計書御調製に付御勵精の段ご苦勞に奉存候。又此程御申越の庭園講義の件に付テハ当方に於て夫の時間の都合相考申候処, 水曜日の午前九時より十一時までの二時間に相願度本月二十一日か廿

八日の何れにても貴方のご都合次第御決定の上御一報相願度, 尤も原稿は謄写版印刷の都合も有之候へハ, 可相成は一週間位以前に御送付相願度候次に設計書は小生罷出, 受領可致心得に候へ共或は用事の為め差支, 使の者を差遣可致やも計られず候は此儀ご了承被下度大体何日頃, 罷出候て宜敷やは折返へし御一報被下度候
不取敢右御問合はせまて。 草々 敬具

六月十三日

武太郎

小澤老臺

玉机下

- 27) 小澤圭次郎 (1911) : 庭園に就て: 日本園芸雑誌第 234 号, 31
- 28) ここに記した小澤日記 (東京都立園芸高等学校蔵) 各日の記述は次の通りである。
・明治 44 年(1911)6 月 21 日(水) 陰, 四時起六時出, 今朝ヨリ無事出校, 九時ヨリ十時迄講堂ニテ前裁秘抄十枚斗話説ス
・同年 9 月 20 日 (水) 最古園方書, 序跋成, 浄写ス
・同年 9 月 21 日 (木) 早出, 駒沢校へ行, 園方書出,
・同年 11 月 25 日 (土) 園書無名巻画図写ス,
・同年 11 月 28 日 (火) 早, 園芸校へ行, 無名巻園方書写修ス,
・同年 12 月 6 日 (水) 四時起六過, 無事園芸校へ行, 九時ヨリ二時間講義増園哲書了, 后一時退校,
・明治 45 年 (1912) 3 月 6 日 (水) 昨日来雨, 四時起七時半出, 園芸学校へ行, 昨来六日迄本講義古伝園方書了, 伝授系図講説ス
- 29) 小澤圭次郎 (1911) : 日本古代の造園書に就て: 日本園芸雑誌第 225 号, 1-6
- 30) 小澤圭次郎 (1893) : 園苑源流考: 国華第 42 号, 116
- 31) 小澤圭次郎 (1915) : 明治庭園記: 明治園芸史: 日本園芸研究会, 303
- 32) 小澤圭次郎校・手写: 山水抄三卷, 東京都立中央図書館加賀文庫収載
- 33) 山水抄三卷の校訂についての, 小澤日記 (明治 25 年日記, 東京都立園芸高等学校蔵) の記述は次の通りである。
・明治 25 年(1892)1 月 27 日(木) 后博物館使来, 川崎千厩ヨリ山水抄一冊, 山高命ニヨリ送來ル, 一読, 甚読カクシ, 作庭記ニ比較スレハ同書ナリ, 体裁ヲ異ニスルヲ以テ直ニ写取ニ取掛ル, 夜亦然,
・同 1 月 28 日 (金) 山水抄浄写, 夜亦然, 昨午後ヨリ三十枚ニ至ル
・同 1 月 30 日 (土) 山水抄写成, 校訂加朱ニ取掛ル
・同 1 月 31 日 (日) 山水抄作庭記著者弁妄ヲ写ス
・同 2 月 1 日 (月) 川崎へ山水抄ヲ返却ス
・同 2 月 2 日 (火) 朝, 山水抄跋ヲ書ス
・同 2 月 4 日 (木) 山水抄校訂了
- 34) 「増園僧正撰 皇國最古園方書 全」の校合の経緯に関する, 小澤日記 (明治 25 年日記, 東京都立園芸高等学校蔵) の記述は次の通りである。
・明治 25 年 (1892) 1 月 29 日 (金) 加州邸野口之布ヲ訪, 不在也, 斎藤書肆へ寄, 野口へ一書ヲ托ス,
・同 2 月 8 日 (月) 前, 本郷加州邸野口之布ヲ訪フ, 山水并野形古写本ト有ル, 仁和寺心蓮院蔵印アリ, 我蔵ハ此写ナリ,
・同 3 月 14 日 (月) 本郷前田邸野口之布ヲ訪フ, 増園撰園書校訂ヲ為ス,
35) 小澤圭次郎 (1893) : 園苑源流考: 国華第 48-50 号
36) 小澤圭次郎 (1892) : 園苑源流考, 国華第 50 号, 35-38
37) 小澤圭次郎 (1915) : 明治庭園記: 明治園芸史: 日本園芸研究会, 467-472
38) 小澤圭次郎編 (1925) : 山水並野形圖 古傳園方書 尺素往来跋抄: 自費出版, 111-114
39) 東京都立園芸高等学校同窓会編 (1978) : 東園の七十年: 東京都立園芸高等学校同窓会, 35
40) 小澤圭次郎 (1906) : 日本園芸雑誌第 159 号, 58
41) 小澤圭次郎自筆 (1911) : 東京府立園芸学校園池解説草稿, 33 丁 (東京都立園芸高等学校蔵)

(2008.9.30 受付, 2009.5.9 受理)